

## 久保常晴先生のこと

坂 詰 秀 一

久保常晴先生が、笈を背負って霧の郷里——釧路を後に上京され、立正大学予科に入学せられたのは昭和三年四月のことであった。その予科を修了後は、文学部史学科に進まれ、卒業後は引き続き史学研究室の副手・助手を勤められた。その後、一時大学を離れられたが、昭和二二年四月に専門部講師、二三年四月に予科講師、二四年四月に文学部助教授、三〇年四月に文学部教授にられた。そして、五二年三月に立正大学学園定年規定によって退職されたのである。

その間、実に半世紀にわたって、修学、そして研究・教育の生活を谷山ヶ丘におくられたことになる。

先生は、北海道旭川において出生され、以降、釧路において小・中学校の課程を修められ、卒業後は、母校である釧路第四尋常小学校の代用教員として教鞭をとられた。その教壇生活の途中、郷土史編纂の必要上より考古学的遺跡・遺物についての知識をうることになった。

人の一生は、ささいな偶然によってその後の方向が変わってしまうものである。そのまま師範学校を卒業した多くの同僚教員とともに、釧路の地において教育一筋の道をおくることになったであろう先生にとって、街の書店で見掛け

た一冊の『考古学雑誌』（第一七卷第二号 昭和二年二月刊）がその後の人生を変えてしまった。まさに運命のしからしむるところであった。それを紐解くうちに、立正大学歴史地理学会の夏期講習講師として東京帝国大学の原田淑人博士の名があり、さらに同博士が立正大学で中国考古学の講義を担当されていることを知った。後に先生はこの記事によって「進学の目標を得た」と回想されている。

予科を修了され、念願の原田博士に師事して考古学の勉強を果たそうとの熱意をもって文学部史学科に進まれた先生にとって思いもかけぬことが起った。それは原田講師の退職である。その頃原田博士は、貔子窩・牧羊城の発掘をはじめ、北京大学の実施した燕の下都の発掘に招聘されるなどきわめて多忙であったことが辞任の理由であったことと推測される。原田博士の退職は、先生にとって一つの転機になった。それは予科在学中より指導をうけていた石田茂作先生の影響を急激にうけるようになっていったことである。

石田博士は、大正一二年四月より島地大等博士の推挽によって立正大学に出講されており（講義題目「仏教文化史」、当時は、東京帝室博物館の鑑査官補であった。仏教関係の遺跡・遺物に造詣の深い石田先生の指導をうけて研究の目標も定まった先生は、卒業論文「題目板碑を通じて見たる関東地方に於ける日蓮宗の状況について」を執筆され、昭和九年三月に卒業された。

その後、副手として助手を勤められた先生は、仏教考古学の道をただ只すらに進まれて今日にいたったのである。先生のご専門は、仏教考古学であるが、その業績の全容は、還暦に際会して編まれた『佛教考古学研究』（A5判三七三頁）、古稀を記念して編まれた『続佛教考古学研究』（A5判四〇四頁）の二冊に収録された四〇余篇の論文によって窺い知ることが出来る。また『新版仏教考古学講座』第七巻の墳墓篇は、先生の編集になるものである。さらに学位論文となった『日本私年号の研究』（A5判五三七頁）は、考古学はもとより文献史学そして金石文に対する

該博さを余すところなく發揮された前人未踏の画期的業績として不朽の声価が高い。

このような先生の業績を瞥見してみると、そこには対象とされる資料を捉える基本的な視点を知ることが出来る。それは一貫して資料の丹念な渉猟に基づく集成を前提とする研究態度である。板碑であれ、仏具であれ、はたまた墓誌であれ、先生は研究目標の設定と同時に完璧な集成を果たすべく着手され、根気よく積年にわたってその充足を心掛けられる。調査、学会への出張の折は勿論のこと、教え子の結婚式の時など、あらゆる機会を捉えて資料の充実に計られるのである。それはまさに研究目標達成への執念の反映である、といえるであろう。

かかる反面、先生は、学問以外のこととなると飄飄として惘然たるところがある。例えば、有縁無縁の人びとより物事を依頼されると、何んとなくそれに応えられるかのごとき返答をされてしまう。依頼者は、得たり賢し、と嬉嬉として引き揚げる。しかし、先生の本意は決して引き受けてはいないのである。そこで、後日、再訪して改めて先生に具体的にお願いとまわったく期待はずれの応答が返ってくる。大袈裟に言えば驚愕する人もあれば、また、逆に前回の談合結果をもとに強引に頼みこむ人もいる、といった具合である。そして最後には不本意乍ら依頼を引き受けられる結果になる。二〇年近く、先生の傍で勉強してきた私にとっては、その都度どうしたものか、と思案投げ首の状態であるが、先生は一向に動じられない。まさに大人である。

平生の先生は緘黙であるが、ご酒が入ると饒舌になられる。決して叱ることのない先生であるが、酒席では必ず本音を漏らされる。そこで私なぞ平生の迂遠のご指示よりは酒を酌み交し乍らご意向を伺うことの方で早道であると悟るようになったが、酒仙を標榜される先生のお相手なぞ出来るはずもない。したがって、いまもって先生の本意が判然と理解しえないことが多いのは申しわけのないことである。

その先生がこのたび退職される。まことに淋しい限りである。しかし、ここ当分の間は、非常勤講師として大学院・

学部の授業を担当されるので、今迄どおりのご指導を頂けることは有難いことである。

去る三月二三日、この日は先生のお誕生日にあたるが、池上の朗峯会館において古稀の祝賀会が開催された。集う者、大学・学界の関係者と教え子一〇〇余名であった。その祝賀会に先立ち先生の講演会がもたれた。演題は先生のご希望によって「カピラ城址第一次発掘調査について」であった。先生がなぜこの題で講演をせられたのか、私には一寸見当がつかなかった。しかし予定時間を軽く三〇余分も超過して熱弁を漸く終られた先生は何か安堵感をもたれたようであった。先生の長い研究生活にあつて、カピラ城址の比定地を求める調査がもっとも印象的であつたことを、はじめて知つたのである。

思えば、ここ一〇数年間にわたつて続いている毎年一月二日の先生宅での新年初顔合せ会の折には必ずカピラ城址のことが話題となっている。調査に参加した者もしない者も、先生の楽しい思い出話を拝聴してきた。この正月二日の会は、先生が外国出張で留守の年を除いて行われてきた。多い年には二〇数名が同時に集つたときもある。その日は、立正考古の同窓会の感を呈する。五〇歳を超えた旧い卒業生より、その年の三月に卒業を予定している卒業生の予備メンバーまでが先生宅に集るのである。そして坏を乾しながら、近況を語り、旧友の懐古談に話を咲かせるのが常である。この些事をもつてしても、先生が多くの教え子より慕われていることが知られるであろう。どうぞ、悠悠として閑閑、ますますのご加餐を祈念申し上げる次第である。

## 主要著作目録

著書・編著

日本私年号の研究

佛教考古学研究

昭和四二年 吉川弘文館

昭和四二年 ニュー・サイエンス社

- 本町田(編著) 昭和四四年 ニュー・サイエンス社  
潮見台(共著) 昭和四六年 中央公論美術出版  
武蔵坂西横穴墓(編著) 昭和五一年 雄山閣出版  
続佛教考古学研究 昭和五二年 ニュー・サイエンス社
- 主要論文
- 雲 版 昭和一一年 仏教考古学講座 第六卷  
鰐 口 昭和一一年 仏教考古学講座 第八卷  
京都本圀寺の鐘銘 昭和一二年 考古学雑誌 第二七卷第一二号  
古瓦名称の変遷 昭和一五年 考古学雑誌 第三〇卷第八号  
烏 八 臼 昭和一六年 考古学雑誌 第三一卷第一号  
擬宝珠名称考 昭和二八年 立正史学 第一六号  
獸脚付陶製蔵骨器 昭和二七年 考古学雑誌 第四〇卷第一号  
埼玉県比企郡大河原御堂浄蓮寺の金石文 昭和三三年 立正史学 第二一・二二合併号  
梵鐘名称考 昭和四二年 立正大学文学部論叢 第二九号  
「歳次」と「歳在」 昭和四三年 『日本歴史考古学論叢』 2  
仏 具 昭和四六年 新版考古学講座 第八卷  
墓地と火葬場 昭和五〇年 新版仏教考古学講座 第七卷  
位 牌 昭和五一年 新版仏教考古学講座 第三卷  
中世の紀年銘ある水盤 昭和五二年 立正大学文学部論叢 第五七号  
(その他六〇余篇省略。著作目録は『続仏教考古学研究』に収録。)